

マレーシアの教育から学ぶ日本との相違点と、授業への活用について

千葉県立木更津高等学校 教諭 小俣 泰隆

1 はじめに

1981年、マレーシアではマハティール首相のもと国策としてルックイースト政策が導入された。目的の一つとして、日本の労働倫理を学ばせるために、人材育成の一環として日本に多くの留学生を派遣したとされている。そのため、国策を始めてから37年経った現在、マレーシアの教育が日本とどのような共通点を持ち、相違点があるのかをこのマレーシア派遣を通して考察していきたいと思った。現地の教育と日本の教育の相違点を踏まえ、日本の教育の良さや授業の改良すべき点について見つめていきたい。

2 マレーシアの技術、経済や物価、言語や文化について

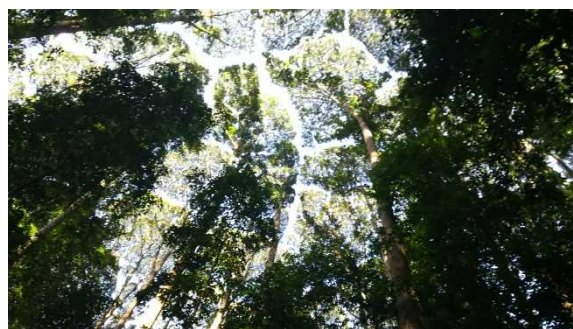
(1) マレーシアの技術

「¹国立研究開発法人科学技術振興機構の海外調査報告書」によれば、科学技術分野に特化した政策があり、現在は先進製造、先進材料、電子工学、バイオテクノロジー、ICT、マルチメディア技術、エネルギー、宇宙、ナノテクノロジー、フォトニクス、製薬の分野に力を入れている。

例えば、熱帯気候を利用したバイオテクノロジーとエネルギーの分野であるバイオマス再利用技術が進んでいる。パーム産業から排出されるバイオマスやパーム廃油から作られるメタンやバイオ燃料は再生可能エネルギーとして世界的に注目されている。

また、FRIM(マレーシア森林研究所)の視察においては、東南アジアにおける森林の再生技術や熱帯性気候特有の植物から、新しい香料、食用植物、薬の発見などが進められている話を伺った。

加えて、現地のセランゴーン州の教育機関の話によれば、STEM(サイエンス、テクノロジー、エンジニア、マスの略)教育の充実を図っており、国の研究機関から助言をもらいながら、今後のマレーシアにおける教育の展望を図っているとのことである。



FRIMの森林

かつて炭鉱跡で荒地だったところが、再生技術により現在の人工林にまで至った。木々の葉が重ならない不思議な現象がみられる。

(2) マレーシアの経済や物価

IMF の統計データによれば、2017 年の GDP 成長率は 5.90%であり、世界の第 29 位である。これは、日本の成長率である 1.71%(150 位)や中国の成長率 6.86%(15 位)を比較すればわかるとおり、中国ほどの成長速度ではないが、同様な経済の成長が見受けられる。実際、首都であるクアラルンプールは、日本に引けをとらないビル街であり、町ゆく人々の様子は日本以上に活気にあふれていた。また、東京海上ライフの日本人スタッフの話では、急速な経済発展の影響から、都心にはかなり裕福な人もいるため、農村とでは生活に格差があるとのことであった。

物価においても、同様なことがいえる。現地の食品は日本の物価の 3 分の 1 から 2 分の 1 程度のものもあるが、クアラルンプール市内においては、輸入製品が多く、日本の物価とさほど変わらなかった。また、レストランにおいても、料理の種類によらず同等のことがいえる。日本の商品や日本食に関してはブランド化しており、むしろ日本よりも高いと感じた。現地商品と輸入商品には値段に格差がつけられていた。

(3) マレーシアの言語や文化

人種はマレー人が約 60%、中華系が約 25%、インド系が約 7%の多民族国家で、公用語はマレー語である。クアラルンプール市内は近代都市のイメージが強く、マレー系文化だけでなく中国系文化やインド系文化も多く見受けられた。

言語に関しては、英語が通じる方々が多い。しかし、ホームステイ先や都心から離れると、英語よりもマレー語が中心となっており、英語による会話が困難なときもあった。

3 マレーシアと日本の教育の相違点とその考察

(1) 教育制度

日本の教育の期間が小・中・高で 6・3・3 年制となっているのに対し、マレーシアの教育の期間は初等教育・中等教育（前・後）・大学予備教育が 6・5（前 3・後 2）・^{III} 2 年制となっている。

日本と大きく異なる点は高校卒業が日本より 1 年早く、大学入学が 1 年遅い人（19 歳の人）が多いということである。

(2) 統一試験

セランゴール州の教育機関によれば、初等教育の終了時に生徒は UPSR という歴史と語学を主としたマレーシア国内の統一試験を受け、その結果に応じて生徒が進む中等教育の学校が決まる。

また、中等教育の前期の終了時（日本では中学 3 年）に生徒は PMR といわれる統一試験を受け、その結果で理科系または社会系に分かれ、後期の学校生活を過ごす。

さらに、中等教育の後期の終了時（日本では高校2年）にも生徒は SPM といわれる統一試験を受ける。この試験は、中等教育後期の卒業の査定もしているため、不合格の場合、卒業資格がもらえない。（日本で置き換えると、不合格の場合は高校卒業の認定をもらえない。）

最後に、大学に行くためには、大学予備教育で STPM といわれる統一試験を受け、その結果で大学にいけるかどうかが決まる。

このように、マレーシアの統一試験は日本より回数が多いためまったく異なるように感じるが、見方によっては日本とよく似ているところもある。日本でも中学入試、高校入試、大学入試のセンター試験と個別試験と考えれば、統一試験ではないが試験回数は同様の4回である。中学入試は日本の場合、全員受験するわけではないが、マレーシアにおいても UPSR で合否判定があるわけではないため、中等教育に行くことができる点は同様である。また、結果として学力のレベル分けをする役割を果たしている日本の高校入試に対して、マレーシアでは先に UPSR でレベル分けを行っているため、高校入試にあたる PMR では将来進む方向性を見極める試験にとどめている。一方で、日本の高校入試は、受験という形で各科目の得意不得意を判断する機会を与え、結果として文理選択を考える場の一つとなっていることから、UPSR と PMR、中学入試と高校入試を合わせて考えると学力を分ける時期は異なるが自分自身を顧みて今後の人生の選択を判断する材料にするという目的は似ているといえる。加えて、最後の統一試験である STPM は日本の大学受験と同様に入学の合否を決める役割である。

しかしながら、SPM だけは日本と大きく異なる。SPM が不合格の場合、中等教育を5年まで真面目に単位を取得したとしても、日本における中学校卒業の扱いとなってしまうため、今後の学歴および就職に大きな影響を与える。少なくとも、マレーシアの学生においては人生にもっとも影響を与える試験の一つであると考えられる。そのため、^{iv} 現地の中等教育の職員に確認したところ「中だるみ」といわれる時期や「定期試験前だけ勉強する」といった考えはマレーシアの学生にはなさそうである。常々日本の教育では、学習に対する意欲の低下が課題となっている。仮に、マレーシアのようにセンター試験（今後、全国共通テスト）に合否判定が付き、高校の卒業認定に関わるようになった場合は大きく改善されると考えられるが、この卒業認定方法への反対が多いことを想像することは難くない。

（3）教科・科目・授業時間

現地の学校での初等教育と中等教育における主要科目は語学（国語）、数学、理科、社会で、初等教育における社会はマレーシアの歴史を中心とした内容である。一方で、日本で教えられている芸術などの科目は特別な授業として扱われ、普段の授業では扱われていない。

また、授業時間に関しても日本とは大きく異なる。SMK SEAFIELD 中等教育学校では後期生が午前7時30分から授業が始まり、10時頃に食事、昼食時間までに授業が終わる。また、前期生は午後1時30分から授業が始まり、3時頃に食事、6時30分に授業が終わる。日本で置き換えると、午前中が高校生の授業、午後が中学生の授業となっている。子どもの多いマレーシアでは教室が不足しているため、同じ教室を利用することで対応している。また、昼食とは別に食事する時間があり、大きな食堂もあった。個人的な意見ではあるが、職員含めてよく食べる印象が強かった。

現場の教育では語学に関して、目を見張るものがある。初等教育においては、どの教科においても教科書はマレー語で書かれているのに対し、中等教育からの教科書は学校で指定された語学で教科書が書かれている。たとえば、英語を主軸とする学校では、数学や社会の教科書でも英語で書かれている。そのため、外国語を自然と習得できる環境が整っており、中等教育卒業には2つの言語を扱えるようにしているとのことだった。また、授業ではその他にも第2外国語を扱っており、セランゴール州の教育機関によれば、以前は日本語が人気であったが、近年は中国語が増えてきたとのことである。

また、自分の専門科目である数学では、様々な道具を使ってゲームを利用した授業を実施していることもあるとのことだった。実際、教室の後ろの棚には写真のように三角形のパズルや「PENTAGO」、「CHESS」といった道具が置いてあった。使い方を伺いたかったが、数学の担当者に会えなかったのが残念である。



他にも、英語ではコンピュータを使って、生徒間でクイズ形式の問題を出すといったICT活用をした授業や理科では模造紙を利用したプレゼンテーションを行って生徒の理解を深めているとのことであった。日本以上に、言語活動を重視している傾向がみられる。

(4) マレーシア教育の課題

日本と同様に、勤務時間が長いことが問題であるとセラランゴール州の教育機関は言っていた。加え、マレーシアでは教育機関の就職者は女性が多いため、家庭への影響が大きいと SMK SEAFIELD 中等教育学校の職員は言っていた。先ほど、述べたとおり、学校の授業時間は7時30分から18時30分となっていることから、実質的な拘束時間は11時間である。子どもが多いため、致し方ないことであるとも言っていた。

5 日本教育の改善点および授業への活用

先に述べておくと、日本の教育と大きく異なるため、現在の日本の教育で同様なことを実施するのが不可能に近いところもある。しかし、その点も踏まえながらも、今回の研修を通して、マレーシアの教育から取り入れたい点としては、以下の3点であると思った。

(1) 学問に対する生徒の意欲の高さ

学問に対する意欲の高さの要因が2つ考えられる。

1つめは統一テストに起因する。特にSPMに関しては卒業認定を得るために学力を伸ばそうとする学生は多いと考えられる。

2つめはゲームを活用した授業である。普段の授業が遊び感覚で楽しいということで授業へのやる気がある。数学の授業の手法はわからなかったが、英語の授業でコンピュータを利用したクイズ形式の授業はなかなか楽しいものであった。これは、日本の現場の数学にも応用していきたい。

(2) 言語活動の充実

日本より言語活動が充実している要因は3つ考えられる。

1つめは、多人種国家であり、家庭によって話す言語が違うところにある。普段の生活から他言語にあふれている。これに関しては、現在の日本では該当しないため、利用することができない。

2つめは教科書にある。3の(3)でマレーシアの教科書について述べたが、今の日本ではマレーシアのように英語で書かれた数学や社会の教科書などが充実していない。仮に充実していたとしても、英語以外の教員が一定以上の英語能力を持っていることが必須で、今の日本の教育現場に対応できる、または対応しようとする人材が多くい

るとは考えにくい。したがって、これは不可能ではないが、今の日本では現実的ではない。

3つめは参加型授業の活用である。マレーシアではグループ授業やプレゼンテーション型の授業が多いため、生徒間で行う対話型の教育活動が充実している。現在、日本でも参加型や対話型授業が求められているため、マレーシアの授業は参考にすべき点が多かった。ただし、参加型授業はある程度の学習意欲が生徒にあることを前提としているところが見られた。

(3) 学校の拘束時間

マレーシアでも現場の職員の労働時間が長いことが課題になっている。日本の職員も同様であるように感じるかもしれないが、マレーシアでは日本の生徒の学校の拘束時間の長さにも驚いていた。現場の職員の方から、「日本人は最も大事な授業を忘れている」という意見があった。それは「家族」という科目で、「家での会話」という授業を忘れていたとのことである。実際、今の日本の労働環境では、早く生徒が帰れたとしても、家族が仕事で帰ってこられない家庭が多い状況も事実である。しかし、意見としては参考とすべき点が多い。生徒の学校での拘束時間を労働として考えた場合、部活動をしている生徒は本校では毎日最大約 11 時間の勤務をしているのと同様であると考えられる。社会が、適切な労働時間を守る時代になりつつあるからこそ、我々の勤務時間だけでなく、生徒の拘束時間に関しても考慮すべきであろう。

6 おわりに

マレーシアの教育を学ぶことで、自国の教育の良さや改善すべき点などを発見する機会が得られた。一方で、マレーシアの特徴を生かした教育システムは、日本と異なることが多いため、授業に活かしていくことが難しいと感じたものも多かった。しかし、それは現在の日本に合わないことであって、日本の教育が変化するにつれて、参考になる可能性があると思えた。

今後、マレーシアだけでなく海外の教育を知ること、これからの教員生活の中で変化していく日本の教育に、対応していく術を学んでいきたい。

i 参考資料

国立研究開発法人科学技術振興機構「海外調査報告書—マレーシアの科学技術情勢」
(<https://www.jst.go.jp/crds/report/report10/MY20161130.html>)

ii 参考資料

GLOBAL NOTE「世界の実質GDP成長率 国別ランキング・推移(IMF)」
(<https://www.globalnote.jp/post-12798.html>)

iii 補足

大学予備教育が2年制である旨記載しているが、現地中等教育学校「SMK SEAFIELD」の職員から聞いた内容では、条件によっては1年で大学に行く場合やそもそも大学予備教育を受けなくてもよいこともあるといていた。そのため、はっきりとした教育の期間がわからない。

iv 補足

中等教育学校「SMK SEAFIELD」において、下記のような質問をした。
「Form4 から 5（高校1年から2年）の間で勉強の意欲が全体的に下がる時期があるか。」という質問をし、「ない。」と答えた。また、「テストはあるのか」と尋ねて「ある。」と答えたので、「テスト前の方が普段より勉強するのか。」と尋ねたところ「変化はない。いつもどおりに勉強している。」と答えた。また、「SPMは大変だ。」ともいていた。